

## 「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	順天堂大学	拠点番号	F30
申請分野	医学系		
拠点プログラム名称 (英訳名)	病院感染予防のための国際的教育研究拠点 (The International Center of Education and Research for the Prevention of Hospital Infection)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 基礎医学〉(病院感染)(感染制御)(微生物ゲノム)(予防医学)(感染免疫)		
専攻等名	大学院医学研究科 環境と人間専攻・人体の生命機能専攻・人体の再生再建専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 平松 啓一 教授 他 19名		

### ◇拠点形成の目的、必要性・重要性等:大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p>&lt;本拠点がカバーする学問分野について&gt;                  病院感染制御科学 (院内感染、感染症、化学療法学、免疫、微生物学、病理学、病態生化学、および内科、外科学などすべての臨床の諸領域を包含し、さらに建築学、病院管理学、公衆衛生学なども含む)</p>
<p>&lt;本拠点の目的&gt;                  病院感染を予防し、近代医療が安全に行われる病院環境を整備すること、それを実施指導できる感染制御の専門家を育成することを最大の目的とする。不条理な病院感染の犠牲者を出さないようにし、市民の病院に対する信頼を回復することを目指す。そのために、実際に順天堂医院で実際に科学的な感染制御を実施し、全国の手本となる実績を示す。さらに基礎研究を振興し、病院感染の克服をめざす病院感染制御科学の新研究領域を開拓する。</p>
<p>&lt;計画:当初目的に対する進捗状況等&gt;                  科学的病院感染制御の実施 看護部から2名の若手看護師をICNとして推薦、大学院助手、講師として経験豊富な日本人ICN、英国人ICNをそれぞれ1名採用、既存のICN1名と合わせて、1024bedに対して5名のICNとICD1名を有する、国内最高の感染管理体制を確立。ガイドラインの作成、サーベイランス、手術部、検査部を中心としたオーディットを行い、現在その活動の成果を調査中。                  教育面では、新しい領域を担う若い人材を養成することが最も重要である。そのため、感染制御科学という大学院を新たに設け、附属実験施設、大学院生を平成16年度から募集した。ICD1名、ICN2名、臨床微生物学者1名、Bioinformatician1名を感染制御科学の講師および助手として採用し、公衆衛生、生化学、病理、免疫、細菌など、関連分野の講義をCOE実行分担者とともに行い、研究指導をおこなった。さらに英国を中心とした感染制御専門家8名を招き、各自1週間ずつ滞在してもらい連続講義を行った。英語力を養成するためのBritish Councilによる少人数英語教育を毎週行った。また、その修学を支援するため、奨学金制度を設けた。本学の若手職員、大学院生から、この領域の研究に参入する若手研究者を養成するため、若手研究者育成プログラムを設けた。                  基礎科学は、MRSAを含む院内感染起因菌の迅速診断/タイピング用のDNAchipの開発、人工常在菌の開発に向けた黄色ブドウ球菌の病原性を明らかにするためのゲノム研究は、新たに2つのブドウ球菌株の全塩基配列を決定したことにより順調に進んでいる。</p>
<p>&lt;本拠点の特色&gt;                  病院における感染制御を、大学院での感染制御科学の研究と連動することにより、実際に役立つと同時に科学に立脚した(エビデンスに基づく)サイエンスとしての感染制御科学を追求する。まさに、社会への研究成果の直結という意味で、最も健全な、公の研究プロジェクトと言える。そして、このような試みは、現在、日本でも、世界でも、唯一である。</p>
<p>&lt;本拠点のCOEとしての重要性・発展性&gt;                  病院感染を防ぐためのすぐれた専門家を育成することにより、全国の(一部外国へも)医療施設での感染管理の波及効果がある。また、本大学院と日本看護協会等認定感染管理看護師とが連携し、地域、全国レベルのネットワークの形成を視野に入れており、将来的には、このネットワークを通じた、感染制御の支援システム、コンサルテーションを行う計画を持っている。</p>
<p>&lt;本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果&gt;                  5年後に感染制御科学の第一期大学院生が学位を取得し社会に出る。卒業生は、一部は大学に残り、さらに感染制御の研究と実践を行う。他の卒業生は地方の病院や大学に席をもとめ、それぞれの立場で、感染制御を行い、後進を育成する。さらに、上述のネットワークの一員として全国の感染管理の普及、質向上につとめる。</p>
<p>&lt;本拠点における学術的・社会的意義等&gt;                  学術的には、病院感染の基礎医学的な問題(薬剤耐性、病原微生物による感染症の解明とその制御、患者の易感染状態の科学的な解明と克服など)、病院感染を未然に防ぐための(我が国独自の)ガイドラインの作成と実践、感染を防ぐための新しい病院設計、建築など、臨床に即した問題の解決に資する。このようにして、我が国の病院感染を減少させることで、医療に対する国民の信頼を取り戻し、また臓器移植などの最先端医学の促進に寄与する。</p>

### ◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価)                  当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント)                  人材育成については、若手研究者への支援が強力であることは評価できる。情報を国際的に発信し、国際社会から研修者を受け入れる力量を持つ人材の育成を目指していただきたい。院内感染制御の専門家の育成は極めて重要な課題であり、希望者の募集や広報など、一層の努力を希望する。                  全国から短期間の研修を受け入れる配慮もお願いしたい。                  有機的連携については、臨床現場と連携して感染管理活動を実践していることは特に評価される。                  研究活動については、目的にフォーカスして計画的に実施され、成果を上げている。感染予防体制の確立を目指した全国的な取り組みも視野に入れて、今後の精力的な展開が期待される。リスク管理の視点からの取り組みを加味することが必要と思われる。また、ガイドラインは標準的な病院でも実現可能なものが必要である。今後、拠点としての波及効果を期待する。</p>